

時

天皇の代替わり儀式と オクトーバー・フェスト

評



東京慈恵会医科大学
小沢隆一

本誌を読者が手にするのは、10月22日の即位の礼(中心行事は「即位礼正殿の儀」)が済み、同日から25、29、31日と計4回続く「饗宴の儀」が行われている頃だろう。これらは、11月14日開始予定の大嘗祭と合わせて、天皇の代替わりを締めくくる秋の「大イベント」である。これらがもつ意味について、同じく王家の祝祭という由来をもち、「収穫の秋」にちなんで催されてきたドイツ、ミュンヘンのオクトーバー・フェストと対照しながら考えてみたい。

王家は、その権威を高めるために、王の即位や王族の結婚に際して、民衆に娯楽を提供し酒食をふるまう祝祭という「仕掛け」を利用する。ミュンヘンのオクトーバー・フェストは、1810年10月、バイエルン家の王太子ルートヴィヒとザクセン・ヒルトブルハウゼン公女テレーゼとの結婚の折に催された競馬大会に始まり、19世紀末頃にビールやソーセージが売られるようになる。そのオープニング・セレモニー、ビール製造元の飾り馬車や各地域の市民楽団が続々と街を練り歩くパレードは、国民的祝祭と呼ぶにふさわしい。

これと比べると、即位礼正殿の儀の後のパレード(祝賀御列の儀)は、天皇皇后を乗せたオープンカーが通り過ぎるだけ、全行程30分ほどの催しである。厳しい交通規制がしかれ、「自撮り棒禁止」、「屋上・ベランダなどからのぞき込みや撮影禁止」などの規制も加わる。果たして、スポーツ選手やチームの優勝パレード並みの「盛り上がり」が実現するか?規制当局の姿勢からは、むしろそうではなく粛々と済ますことを期待しているような気配が感じられる。

そもそも、警視庁のHP上の当日警備に関するサイトのタイトルからして、「即位の礼に参列する外国元首・祝賀使節の来日に伴う警備」なのであるから、一般市民の目線に立った警備ではないことが透けて見える。この日を国民の祝日としたことの「本当」の意味は、首都東京の中心エリアで市民に通常の業務と活動、そのための移動をしてもらっては困るという、即位礼行事による「都心ジャック」、すなわち「人払い」にあるといえよう。

即位礼正殿の儀自体が、高御座から天皇が内閣総理大臣その他の参加者を睥睨(へいげい)することで、国民主権原理にそぐわない儀式であるが、即位の礼当日の儀式全体が、このように国民主権の観点から再検討を迫るべき性格のものだと言えよう。

大嘗祭もまた、その「秘儀」めいた儀式の様相も手伝って、「国

家・国民のためにその安寧と五穀豊穡などを感謝し、祈念される儀式」(宮内庁HP)という触れ込みとはかけ離れた印象を払しょくできず、また、その宗教行事という性格から、これへの多額の公費(宮廷費)の投入が憲法の政教分離原則に違反するものである。食とそれに関わる政策に対する人々の意識の向上は、特定の宗教との関わりを払しょくするところから生まれるのではないか。諸外国の人々の「食へのこだわり」の様子を見ながら思うところである。

ルートヴィヒ1世の婚儀を機縁としたオクトーバー・フェストは、その孫にあたるルートヴィヒ2世の「見果てぬ夢」(ノイシュバンシュタイン城などの建設)の帰結としての王国の財政破綻や、第1次大戦敗北ののち、ドイツ革命の重要な一部をなすバイエルン革命による王国の崩壊があってもなお引き継がれ、そしてナチスの支配と第二次大戦中の中断もぐり抜けて、今日、国内外の多くの人々を呼び込むにぎやかな祝祭となっている。民衆が心から楽しむ祝祭は、民主的な政治システムを基盤とすることを、それは教えてくれていると思う。

さて、私たちは、「王家の祝祭」が続くこの秋、虎視眈々と平和と民主主義を脅かす改憲を狙う政府・与党の策動に注意を怠るわけにはいかない。

(おざわ りゅういち)